

IPA音声学技能試験について

On IPA Certificate of Proficiency
in the Phonetics of English

成 田 圭 市

Keiichi NARITA

0 はじめに

今夏は、国際音声学協会（International Phonetic Association）が主催する英語音声学技能試験（IPA Certificate Examination in English Phonetics, 以下 IPA 試験）を受験するためにしばらくの間ロンドンに滞在した。本稿では、筆者の体験に基づいて、この試験のための受験準備コースの概要を紹介するとともに、試験の内容およびその傾向と対策について少しく論じてみたい。音声学を専門とする人のみならず、広く外国語の学習・研究に関心のある人、あるいは発声法や言語療法などに携わる人にも大いに資すると思われるからである¹⁾。

IPA 試験の詳細は第 3 節に譲るが、その趣旨は、英語音声学および一般音声学に関する専門的知識と技能を、筆記試験と口頭試問により査定するというものである。IPA の Handbook (1999: 197) によれば 1908 年から行われているとのことなので、今年ちょうど百周年を迎える由緒ある試験である。長らくロンドン大学音声学教授を務め、IPA 試験の試験委員でもある John Wells も、そのホームページの中で、1908 年発行の IPA 機関紙 *Le Maître Phonétique* の当該部分を示して、百周年を明記している²⁾。

3^e. egzamē d fonetik. a l ynanimite, le kō:sej s e prō-
nō:se ā favœr d œ ssertifika d etyd fonetik, a delivre ofisjelmā
o nō d l af par doz egzaminato:r d ynmā kalifje. kom prēmjez
egzaminato:r (a defo de Sweet ki ave rfy:ze) št ete nome:
pur l almā, W. Viētor;
pur l ō:glē, E. Edwards;
pur le frū:se, P. Passy.
nu donō si-aprē le mōdel adopte.

IPA の公用語は 1971 年に英語に変更され、機関紙も *Journal of the International Phonetic Association* (JIPA) と改題されたが、この引用からもわかるように、1886 年の設立以来長期にわたってフランス語が公用語であり、また、本文の記載も正書法ではなく IPA (International Phonetic Alphabet) による音声表記が用いられていたのである³⁾。

1 ロンドン大学夏期音声学講座

IPA試験の準備コースは、ロンドン大学のUCL (University College London) で毎年夏に行われる夏期音声学講座 (Summer Course in English Phonetics, 以下SCEP) の一部として開講されているので、まずはこの夏期講座の実施母体であるUCL音声学科について簡単に触れておきたい。

SCEPを主催するUCLの音声学科は、調音音声学のメッカとして100年以上の歴史を誇る世界有数の研究・教育組織である。その歴史を遡れば、19世紀後半に、“Visible Speech”という音声表記法を考案したAlexander Melville Bellと、その息子で電話機の発明で知られるGraham Bellが、言語音声についての講義を担当したのもってUCLの音声学研究の嚆矢とすることができよう。その後1907年にDaniel Jonesが音声学を体系的に講じ始め、英国初の音声学科がUCLに設立されることになる。初代音声学教授のDaniel Jones以降も、音響音声学のD.B. Fry、機能文法とイントネーション研究で知られるM.A.K. Halliday、音声学やイントネーションの著作で名高いJ.D. O’ConnorとG.F. Arnold、今なお調音音声学の基本図書とされる『英語音声学』を著したA.C. Gimson、そして現在のUCL音声学科を支えるJ.C. WellsやMichael Ashbyへと、その伝統は連綿と続いているのである。ちなみに大学の組織としては、Daniel Jones由来の音声学科は、1971年に言語学科と融合して音声学・言語学科 (Department of Phonetics and Linguistics) となり、さらに本年2008年には心理学科およびコミュニケーション科学科と統合して心理学・言語科学部 (Division of Psychology and Language Sciences) の一部門となった。

こうした長い歴史と伝統を誇るUCL音声学科のスタッフや出身者が中心となって、調音音声学のほぼ全領域を網羅的かつ体系的に教授する集中講座がSCEPである。この夏期講座が現在のような実施体制になったのがいつ頃からのかは定かでないが、その出発点は1915年開始の夏期講座とされており、既に90年以上続いていることになる (Collins & Mees 1999 : 414-5)。

SCEPの授業で扱われる大まかな内容は以下の通りである。

- * phonemic system (vowels and consonants)
- * segmental analysis (allophonic processes)
- * word stress
- * weakening and coarticulation processes
- * sentence stress (accent, tonal stress)
- * intonation and meaning

毎年世界中から学生やEFL教員・専門家など150名前後の参加者が集まるため、外国語としての英語という観点からの指導にも重点が置かれており、一般参加者の九割以上が所属するコースにはEFL Strandという名称が与えられている (それ以外の十数名は、次節で紹介するIPA Strandに所属する)。二週間の短期集中コースではあるが、以下のスケジュールからもわかるとおり、きわめて密度の濃い充実した内容の50時間を経験することができる。

		EFL strand	IPA strand
Monday to Friday	09 : 00	Lecture	
	09 : 55	Pronunciation Class	General Phonetic ear-training
	11 : 15	Lecture	
	12 : 10	Intonation Class	English Workshop
	14 : 00	Ear-Training	Examination Practice
	15 : 00	Specialized Lecture (on 8 days)	

150名ほどの参加者の音声学に関する素養はまちまちなので、学生・EFL教師・大学教師・専門家などに分類された10名程度の小グループが作られ、参加者はその小グループのいずれかに属することになる。このスケジュール表に示されているように、全員が一同に会する全体講義とグループごとの演習が交互に行われるのも、SCEPの優れた特徴の一つである。講義終了直後の演習で、講義内容に関する質疑応答をしたり、議論を発展させたりできるからである。表中で“Lecture”となっているのが大教室での全体講義であり、それ以外は小グループでの演習やチュートリアル形式の授業である。

また、講座開催中のみならず、講座開始前後の一ヶ月の間も、オンラインでの非常にきめの細かいサポートが行われており、参加者は、いつでも自由に講義の補助資料を閲覧したり、聞き取り訓練のための音声資料にアクセスしたり、あるいは掲示板に質問や意見を書き込んだりすることができる。

全コース終了時に参加者が提出する授業評価アンケートの自由記述欄に寄せられた感想のうち、SCEPのホームページに掲載されているものをいくつか紹介しよう。参加者の国籍の多様さにも注目したい。

- “Brilliant course!” (a Polish participant)
- “Everything perfect....The course was excellent. I was amazed at this well-planned course. The level is very high...I'd like to recommend this course to all my friends!” (a Japanese participants)
- “I expected the course to be excellent—but I couldn't even have thought how wonderful it would be.” (a Russian participant)
- “Whether you're an English learner, an English teacher, a voice or speech coach, or just fascinated by sounds, this is the course you're looking for.” (an English participant)
- “Its conception, organization, and overall structure, as well as the academic quality, are all high and deserve top marks.” (an Italian participant)
- “This was the best course I have taken.” (an Austrian participant)

いずれもきわめて肯定的な評価だが、筆者も同様の感想を持ったし、他の参加者から直接あるいは間接に聞いた意見にも否定的なものは皆無であった。

2 IPA 試験受験準備コース

上で説明したように、SCEPには、一般の受講者を対象としたコース（EFL Strand）とは別に、IPA試験に合格することを手助けするためのIPA Strandという受験準備コースが開講されている。このコースは2004年に始まったばかりであり、試験委員のJ.C. Wellsの説明によれば、IPA試験受験者および合格者の減少に歯止めをかけるために設けられたとのことである。一般受講者を対象としたEFL Strandには特に参加資格に条件はないが（TOEFL 540点、IELTS 6.5以上が一応の目安とされている）、IPA Strandを受講するには、あらかじめロンドン大学から送られてくる予備試験を自宅にて受験し、その結果、IPA Strand受講後IPA試験に合格する可能性があることと認定されなければならない。

この予備試験問題は、実はIPA試験の過去の筆記問題そのものである。これを正式の試験と同じ二時間半の所要時間で、参考書などを参照せずに解答してUCLに送り返すわけである。提出後数週間して試験責任者のPatricia Ashbyから筆者に送られてきたフィードバックは、驚くほど丁寧に答案を吟味して詳細なコメントを付したものであった。80点満点で44点という点数ながら、二週間の集中的な受験コースのカリキュラムをこなせば本試験に合格するであろうというのが試験委員の評定であった。ちなみに、本試験での筆者の筆記試験の結果は80点満点で61点であったので、受験コースでの二週間のトレーニングは確かに役に立ったといえる。

例年IPA Strandには10～20名程度の参加者が受講を許可されるが、今年を受講者は私を含めて14名を教えた。その内訳は、音声学・音韻論を大学で講じているアメリカの言語学者や、英語教育学で博士号を有する中国の大学教員をはじめ、大学などの高等教育機関で英語を教えるスペイン・アルゼンチン・イタリア・

ポーランド・香港・イギリスのEFL教師、言語療法士 (speech therapist) を目指す英国人とギリシャ人、言語学で博士論文執筆中のロシアの学生、理系の学位を持ち voice engineering に携わっているイタリア人など、実に多彩な顔ぶれであった。音声学プロパーの専門家を対象としたコースと考えていた筆者にとってこれはやや意外であったが、考えてみれば、どの参加者も音声学の専門的知識と技能を要求される仕事に関わっているのだから、こうした多様性も当然と言えるだろう。

講師はレディング大学の Dr. Jane Setter とウェストミンスター大学の Dr. Patricia Ashby の二人で、毎日の授業は主に Jane Setter が担当した。両講師とも非常に熱意に満ち、丁寧できめ細やかな指導してくれたことは特筆に値する。例えば、毎日宿題として提出させられた音声表記や調音記述のレポートを、実に丹念に読んで詳細なコメントを添えて全員に返却するなど、我々も見習わねばならないと感心したほどである。一般音声学・英語音声学のどちらの授業もきわめて内容の充実した中身の濃い演習であったが、必須文献として指定された Gimson (2008) や P. Ashby (2005), Collins & Mees (2008) などの内容は了解済みという前提で進んでいくので、授業に出席するだけでは音声学の体系的な知識や技能を身に付けることは到底できない。そのため、講義資料として配布された P. Ashby (2008) には、これら三冊の参考書を用いて二週間で試験準備を完成するための模範的な“Revision Plan”が載せられていて、受講生の自主的な勉学に大いに有益であった。

また、試験対策コースだけに、合格するための受験テクニック (答案の書き方や口頭試問での対応の仕方など) にも目配りがなされている。一例を挙げれば、口頭試問で要求されるイントネーションの記述に対する適切な答え方として以下のような方策が示され、これを何度も繰り返し練習させられた。

Recommended Tune Description Strategy (P. Ashby)

1. Say how many word groups are involved.
2. Say which syllables are stressed.
3. Say which syllable/word is the nucleus.
4. Identify and name the nuclear tone.
5. Name the type of tail; if there is no tail, then say so.
6. Name the type of head and say which syllable/word it starts on; if there is no head, then say so.
7. Name the type of prehead and indicate which words/syllables are included in this; if there is no prehead, then say so.

なお、IPA 試験の試験委員であり口頭試問の面接官でもある Patricia Ashby が受験生を指導するというのがやや奇異に思われるかもしれないが、IPA 公認コースということで特に問題はないのであろう。

3 英語音声学技能試験

IPA が主催する英語音声学技能試験 (IPA Certificate Examination in English Phonetics) は、既に述べたように、百年の歴史を持ち国際的にも評価の高い試験である。数多くの音声学の専門家や言語学者たちが受験しているのはもちろんのこと、あまり知られていないが、現代音声学の礎を築いた Daniel Jones も 1906 年に受験し合格した記録が残されているほどである。Collins & Mees (1999: 26) には、Jones の取得した IPA Certificate in the phonetics of French のコピーが掲載され、60 点満点で 56 点という評点は非母語話者の成績としては比類ない好成绩だったとのコメントが添えられている⁴⁾。

当初は英語の他にフランス語とドイツ語の音声学試験も行われていたが、現在では英語音声学のみの試験となっている。毎年 2 回 (今年は 5 月と 8 月) 実施されるが、試験会場がロンドンだけなので、受験者数は高々数十名程度である。とはいえ、毎回世界各地から受験者がやってくることもわかるように、きわめて権威のある試験であるのは間違いない。ただし、日本におけるこの試験の認知度はあまり高くないようで、日本からの受験者は毎年一人いるかいないかくらいである。『ファンダメンタル音声学』(2007, ひつじ書房) を著した高名な英語学・音声学者今井邦彦は、その「はしがき」で、IPA 音声学技能証明書の第 1 級

を取得したことを誇らしげに記しており、また、『日本人のための英語音声学レッスン』（2005、大修館）の著者で音声学者の牧野武彦は、2004年に第2級で合格したことを自らのホームページで公表している。

英語音声学および一般音声学に関する専門的知識と技能を筆記試験と口頭試問により査定する、というのがこの試験の趣旨であるが、では、具体的にはどのような形でそれが査定されるのであろうか。まずは出題内容と配点を見てみよう。現在は合計200点満点で、点数に応じて、First Class（第1級、160点以上）、Second Class（第2級、130点以上）、Third Class（第3級、100点以上）というグレード別の合格となり、合格者には国際音声学協会から音声学技能証明書（IPA Certificate）が付与される。

3. 1 筆記試験 (a 2½-hour written paper) (80 marks)

- Q 1 Phonetic transcription of a passage of English
- Q 2 Articulatory description of an English word
- Q 3 . 4 Two theory questions concerned with the phonetic description of English

筆記試験は二時間半で四問の記述問題に取り組みなければならない。Q 1 の Phonetic Transcription は、与えられた10行ほどの英文を IPA で音声表記するという問題。母語話者は自分の方言で表記し、外国人は RP 発音での表記が要求される。

Q 2 の Articulatory Description は、ある英語の単語を調音する際に観察される調音器官の動きを客観的に記述するという問題。個々の音の調音の仕方に関してはどんな音声学の本にも記述があるが、音が連続する場合の調音器官の動きを詳述した本は皆無に等しい。かろうじて Roach (2000) にはごく簡単な記述が見られるものの、IPA 試験で要求される記述はそれよりも遙かに緻密で網羅的なものである。連続した音を発する際の調音器官は常に動いているわけであるから、その記述も当然 dynamic なものでなければならず、また、前後の音の影響で生じる鼻音化・唇音化などの同時調音やクリッピング・省略などの現象、あるいは接続の有無など、実際の調音に観察されるさまざまな音声過程を全て含んだ精密表記（narrow transcription）に基づく詳細な記述が求められるのである。声帯と口蓋帆（velum）の動きを示す parametric diagram, 母音の実際の音価を示す vowel diagram, 同時調音などで特に問題となる調音器官の動きを示す vocal tract diagram も必須であり、これらの図を含めて3ページ程度の解答が求められる。なお、P. Ashby の与えた模範解答として、“creamcake” という単語の詳細な調音記述を以下の URL で参照することができる。

<http://www.phon.ucl.ac.uk/home/scep/creamcake.pdf>

二つの理論問題は、音声学の基本的な理論に関する問題である。以下に今年の問題を示す。いずれの問題に対しても、少なくとも2ページ以上の解答が求められる。問われている内容は、英語の音素とその異音、イントネーションとその機能、同時調音と同化など、音声学の基本を抑えていればそれほど難しくはない。

Q 3 EITHER: The English phoneme /i:/ is represented using the symbol-shape associated with primary Cardinal Vowel 1. Why is this? When spoken, this phoneme has many different realizations (allophones)—explain in detail the variants found in each of the following: *feed*, *feel*, *feet*, *fee*, *mean*, *need*, *teas*.

OR: English has one lateral phoneme, /l/. However, the pronunciation of the lateral in *beluga* and *live* in the text in Q1 above is different from that in *whale* and *natural*. Give a detailed phonetic account of these two variants and then describe other major allophones of this phoneme, providing examples to illustrate your account.

Q 4 EITHER: Describe the intonation you would expect to hear in the following phrase as it appears in the passage in Q1 above: *they've been taught how to do this*. How could intonation be used to change the meaning of this phrase in other situations?

OR: Use data from the text in Q1 above to illustrate an account of coarticulation. Why do some phoneticians regard coarticulation as a form of assimilation?

3. 2 書き取り (dictations) (60 marks)

Q 1 Dictation of colloquial English to be transcribed phonetically

Q 2 Dictation of nonsense words to be transcribed phonetically

ディクテーションは、試験官が読み上げる英文およびナンセンスワードを聞き取った通りに IPA で音声表記するという課題である。Q 1 は10行程度の英文を試験官が一行ずつ数回読み上げるので、それを IPA を用いて書き取る。同化や脱落などの音声現象に留意して聞き取らなければならない。例えば、正書法なら “before they all get blown away”, “this year”, “next door”, “covered in grape pips” と書き表されても、試験官の読み上げでは、それぞれ /bɪfɔː ðeɪ ˈɔːl ɡeɪp ˈbləʊn əˈweɪ/, /ðɪz jɜː/, /ˈneks ˈdɔː/, /ˈkʌvəd ɪŋ ˈɡreɪp pɪps/ のように発音されるはずであり、それをそのまま書き取ることが求められる。

Q 2 のナンセンスワードというのは、IPA Chart の中でもあまり耳慣れない音を用いて人工的に作られた「単語」である。これを六つ正確に聞き取って IPA で書き取らなければならない。英語音声学の知識によりある程度は対応できる Q 1 の聞き取りとは異なり、こちらは純粋に音の識別なので、IPA Chart に含まれる全ての音に耳を慣らしておく必要がある。例えば以下のような単語を試験官が10回くらいずつ読み上げるわけだが、似通った音の場合、聴覚的な手がかりだけでは識別しにくいこともあり、試験官の口の動きにも十分に留意しなければならない。

1	θmeçbaŋŋ
2	ɲeyk'otɓ
3	ŋ ʒgviçç
4	dʒurɱãç
5	ʃ tʃ'əɫφraz
6	ðriuxɫavŋ

3. 3 口述試験 (oral) (60 marks)

口述試験は、2名の面接官を相手にひとり15分程度行われる。一般音声学に関しては、IPA Chart 内のいくつかの音が記された紙をその場で渡されてそれを調音する作業 (Sound production) と、面接官の発音した音を聞き取って記述する作業 (Sound recognition) が課せられる。Sound production は、例えば以下のような問題が手渡されるので、それぞれの音を数回ずつ発音すればよい。

o	ø	ɛi	ɪa	ʊa	at'a
or					
e	ɯ	ɔu	χa	ŋa	atɪa

Sound recognitionは、例えば“father” [ˈfɑːðə] の [ð] を, [θ], [z], [d], [ʒ] などの音で置換した単語を面接官が発音するので、その置換された音を, “It’s a voiceless dental fricative (voiced alveolar fricative, voiced dental plosive, voiced uvular fricative)” のように口頭で記述すればよい。余談ながら、筆者がこの試験を受けているとき、面接官の発音が [m] なのか [ɱ] なのか判断がつかず、切羽詰って “It’s either a voiced bilabial nasal, or a voiced labiodental nasal.” と答えたところ、面接官は笑って「もう一度発音するから良く口の動きを見なさい」と大げさなくらいに下唇を噛んで [ɱ] と発音してくれたのを覚えている。口述試験というと厳粛で緊張した情景を思い浮かべがちだが、IPA 試験のそれは、むしろ厳正ではあるが、きわめて和やかな雰囲気の中で行われるのである。

英語音声学については、イントネーションのいくつかのパターンを試験官の指示に従って実演する作業と、試験官の発した発話のイントネーションを分析する作業、さらに、その場で渡された10行程度のIPAで表記された英語の文章を正確に流暢に読み上げる作業が課せられ、その後、そのIPA表記の課題文を題材として、音声学上の理論的・実践的な問題点の議論が行われる。ちなみに、授業で配布された資料には、外国人受験生の場合、自分の母語話者にとって困難と思われる発音上の問題を指摘し議論する、といった予想問題が挙げられていたので、それを想定した問答をあらかじめ用意しておいたのだが、豈図らんや、日本語音声には全く触れられず、“smoothing”や異音などについて面接官から尋ねられてやや拍子抜けしてしまった記憶がある。

4 IPA 試験の傾向と対策

前節で概観したIPA試験の内容に鑑みれば、IPA試験が査定しようとする音声学の知識と技能がどのようなものであるのかは自ずと明らかであろう。以下、主要な事項について簡単にその対策をまとめておくことで、将来の受験者への便宜を図りたい。

第一に挙げなければならないのは、IPA Chartの全ての音声記号およびそれが表している音に習熟することである。参考までに、2005年に改定された最新版のIPAを巻末に掲載しておいた。アフリカの70あまりの言語に聞かれるlabiodental flapが最新の追加記号であり、将来はこの音もIPA試験の対象となるはずである。

IPA Chartに載せられている音声記号は、世界中の全ての言語音を表記しようとするものであるから、これを熟知してどの音についても識別できることが、音声学研究の基本的な技能として要求される。受講生の中には、英語以外の音声を学ばなければならないことであらさまな不満を示すEFL教師もいたが、個別言語の音声学は一般音声学の枠組みの中でのみ十二分に理解されるという点を忘れてはなるまい。英語なり日本語なりの一つの言語だけに限れば、そこで用いられる言語音はIPA Chart内に示された言語音のごく一部に過ぎないが、だからといってそれ以外の言語音を知らなくても良いということにはならないのである。似通って聞こえるが調音場所や調音方法が微妙に異なる音や、調音場所や調音方法は同じでもかなり異なって聞こえる音、あるいは母語にはない音を知ることにより、個別言語の音声を相対化して客観的に捉えることができるようになるからである。英語や日本語といった我々に馴染み深い言語の音声を考える際にも、その異音としてどのような音が生じうるのかを知ることが、外国語教育の観点からも重要である。例えば、日本語の撥音「ん」は音声環境により以下のような異なった音声として具現するので、教師は当然ここで用いられるIPA記号の表す音の音学的特徴を知っていなければならないのである。

「さん」([n]), 「さんてん」([ŋ]), 「さんばい」([m]), 「さんれつ」([ɲ]), 「さんにん」([ɲ]), 「さんかい」([ŋ]), 「さんえん」([ɛ̃])

受験コースの授業では、IPA Chartについては受講者が既に習熟していることが前提となっており、取り立てて個々の音声の聴解・産出の訓練は行われないので、各自IPA Chartと音声学の本により練習する必要がある。理屈さえわかればある程度は自修が可能だが、人によっては中々コツがつかめないで苦勞する音もあるようである。今年を受講生の中には、非肺気流によるImplosive ([ɓ, ɗ, ɠ]) や Ejective ([pʰ, tʰ, kʰ]) の理屈がわからずに苦勞している人もいた。音声学者Ladefogedも、Implosiveを調音できるまでに一年近くかかったと述懐しているほどである (Ladefoged 2006: 138)。幸い、巻末に示したよう

に、UCL 音声学科から自習用のさまざまな音声データが刊行されており、中でも“The Sounds of the IPA”というCD-ROMは、コンピュータ上に表示されたIPA Chartをクリックするだけで個々の音を聞くことができ、聴解・産出のどちらの訓練にも非常に有益である。

IPAの聴解・産出と並んで、IPA音声記号を用いてどんな音声でも表記できる能力も、IPA試験において重要視されている。具体的には、筆記試験における英文のIPA表記と、聞き取り試験での英文およびナンセンスワードの書き取りによって評価される。発音記号で英語を学んできた筆者にとってこれはそれほど難しい作業ではないが、他の受講生たちの多くはこのIPA表記にてこずっていたようである。と言うのも、一般にヨーロッパでは外国語の発音を学ぶのにIPA（あるいはそれを簡略化した発音記号）を使うのはまれであり、音声をIPA記号で表記することに慣れていないからである。そのためであろうが、受験コースに参加している間、筆者は何度か同級生から、宿題のIPA表記課題を見てくれるように頼まれたりしたものである。また、電子メールで何人かの同級生と連絡を取り合っただけでIPA試験の結果を比較検討してみたところ、英文をIPA表記する問題で筆者が9割の正答率（20点満点で18点）だったのに対し、筆者と同じく第2級で合格したイタリア人は5割の正答率（10点）に過ぎなかった。これだけをもって英語教育で発音記号の使用を奨励する論拠とすることはもちろんできないが、正確な発音に習熟させる手段の一つとしてIPAの使用もあながち否定できないのではないとも思われる⁵⁾。

IPA表記の訓練としては、Lecumberri & Maidment (2000) という優れた参考書があるので、Wells (2008) や Roach (2006) の発音辞典⁶⁾を参照しながら、これを一冊仕上げるのがまっとうな対策であろう。また、当然ながら、正確に音を聞き取るための耳の訓練も欠かせないが、これについては、上で紹介したCD-ROMをはじめ、聴解訓練のためのさまざまな音声資料がUCL音声学科から入手可能である。

音声学理論に関わる試験問題については、Ladefoged (2006) や Ashby & Maidment (2005) などの一般音声学概説書、さらには、Gimson (2008), Collins & Mees (2008), Roach (2000) などの英語音声学の概説書を丹念に読み込んで幅広い知識を身に付けければ、一応の試験対策にはなる。記述問題で問われるのは、基本的な音変化 (liaison, elision, assimilation, coalescence, etc.) や同時調音・副次調音、音素と異音、イントネーションの機能など、調音音声学の基本的な事柄ばかりだからである。ただし、英単語の調音記述問題 (articulatory description) に関しては、既存の音声学書には網羅的な説明がほとんど見当たらない以上、IPA StrandでのP. Ashbyの授業がほぼ唯一の対策といえるだろう。連続した音声を調音する際の調音器官の連続的なダイナミックな動きを、科学的に観察しそれを客観的に記述する方法を、彼女の2回の講義とその後の演習を通して学べたことは、今回のIPA Strand参加の貴重な収穫であった。

なお、筆記試験では、二時間半でかなりの量の英語を書かされることになるので、素早く正確に英語を書く練習が必須であることは言を俟たない。この点が、我々のような外国人の受験者にとって一番不利な点であるが、TOEFLなどの検定試験とは異なり、英語を書く能力ではなく音声学の知識を評価の対象とする試験であるから、たとえ非の打ち所のない英語でなくとも内容が優れていればそれなりに評価されるはずである。ただし、ダラダラと取りとめもなく書き散らすことは当然避けなければならない。講師のP. Ashbyは授業中に何度も、“pithy”な答案を書くようにと我々に助言したものである。

5 おわりに

筆者は英語学・言語学が専攻領域とはいえ、その一分野である音声学についてはごく基本的な心得しか持っていなかったのであるが、たまたま数年前から専門科目の音声学を担当するようになって、半ば泥縄式ではあるが本腰を入れて音声学を学び始めたというのが実状である。Ladefoged (2006) や Collins & Mees (2008), あるいは Ashby & Maidment (2005) などの優れた一般音声学の著作に親しむうちに、言語教育・言語研究における音声学の重要性に遅まきながら開眼するとともに、言語音声の多様性や音声現象の法則性に深く魅せられるようになり、UCLのオンライン音声学コース PHONLINE⁷⁾を受講したり SCEPに2度参加したりと研鑽を積んできた次第である。そうした数年の研鑽の成果として、どうにかIPA音声学技能試験に合格し、IPA技能証明書(残念ながら第1級ではなく第2級ではあるが)⁸⁾を取得できたことは、筆者にとって実に感慨深いものがある⁹⁾。

註

1. 今年度の教育学部サバティカル研修の一環として参加したものであり、研修のための休暇を与えてくださった教育学部各位に感謝致します。また、SCEPで熱心に指導してくれた、Dr. Jane Setter, Dr. Patricia Ashby, Prof. Michael Ashby, Dr. J.C. Wellsにも感謝したい。
2. <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/wells/index.html>
3. “IPA”という略語は、“International Phonetic Association”（国際音声学協会、1886年設立）と“International Phonetic Alphabet”（国際音標文字、1888年制定）の両方をさすが、本稿では、文脈からどちらに言及するか明らかなので、どちらの意味なのかを特に断らずに使用する。
4. Daniel Jonesの取得したIPA技能証明書には1906年の日付が入っており、本論冒頭で述べたIPA試験の発足年と矛盾する。おそらくは、1908年にIPA評議会でIPA試験が正式に承認される前から、非公式に技能試験が行われていたのであろうと考えられる。
5. 英語教育における発音記号導入の是非およびその扱い方については、稿を改めて考察する予定である。
6. 単語の発音を調べるには英和辞典があれば通例事足りるが、普通の辞典に載っていないような固有名詞や外来語、あるいは専門用語などの発音を知るには、専門的な発音辞典が役立つ。Wellsの発音辞典には筆者の名前の発音も載っているが、第2版（2000）の /nə'ri:tə/ が、今年出た第3版（Wells 2008）では /'næri:tə/ と変化しているのには我ながら驚いた。
7. UCL音声学科が2006年に無料で試行したオンラインコース。二百名近くの応募者の中から書類専攻で選抜された25名の一人に選ばれたのは本当に幸運であった。PHONLINEは2008年から有料化されて本格的に実施されている。
8. 技能証明書には、IPA試験のそれぞれの問題ごとに得られた得点が合計点とともに記してある。参考までに、筆者の証明書に記された点数を以下に示す。IPA表記・IPA音声や理論問題ではそこそこの点数が取れているものの、聞き取りや英語発音の技能面が弱いことが如実に現れている。

Phonetic Transcription of English	18/20
Questions on Theory	43/60
English Phonetic Dictation	20/30
Dictation of Nonsense Words	19/30
Oral—Articulation and Recognition	32/40
Oral—Reading English from a Phonetic Text	12/20
Total	144/200
9. 本稿は、2008年11月15日開催の新潟大学言語研究会（NULC）第30回研究会での口頭発表に加筆したものである。

参考文献

- Ashby, M. & J. Maidment. 2005. *Introducing Phonetic Science*. CUP
- Ashby, P. 2005. *Speech Sounds*, 2nd ed. Routledge.
- Ashby, P. 2008. UCL SCEP IPA Strand Course Starter Pack. UCL.
- Collins, B. & I. M. Mees. 1999. *The Real Professor Higgins: the Life and Career of Daniel Jones*. Mouton de Gruyter.
- Collins, B. & I. M. Mees. 2008. *Practical Phonetics and Phonology*, 2nd ed. Routledge.
- Gimson, A.C. (Rev. by A. Cruttenden). 2008. *Gimson's Pronunciation of English*, 7th ed. Hodder.
- IPA. 1999. *Handbook of the International Phonetic Association*. CUP.
- Ladefoged, P. 2006. *A Course in Phonetics*, 5th ed. Thomson
- Lecumberri, M. L. G. & J. Maidment. 2000. *English Transcription Course*. Arnold.
- Roach, P. 2000. *English Phonetics and Phonology*, 3rd ed. CUP.

- Roach, P. et al. 2006. *Cambridge English Pronouncing Dictionary*, 17th ed. CUP.
Wells, J. 2006. *English Intonation*. CUP.
Wells, J. 2008. *Longman Pronunciation Dictionary*, 3rd ed. Longman

音声資料 (いずれも発行元は Phonetics and Linguistics, UCL.)

- Abberton, E. 2007. Material for Ear Training CD.
Ashby, M. 2007. Intonation Exercises CD.
Ashby, M. and J. Maidment. 2006. Analytic Listening Exercises CD.
Ashby, M., J. House, & J. Maidment. 2003. IPA Sounds in a Clinical Context CD.
Baldwin, J. 2007. Ear Training for Foreign Students CD.
Iverson, P. 2008. UCL Vowel Trainer CD-ROM.
Wells, J. and J. House. 2003. The Sounds of the IPA CD-ROM.

参考URL

- <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/scep/index.html> (SCEP のホームページ)
<http://www.phon.ucl.ac.uk/> (UCL 音声学科のホームページ)
<http://www.arts.gla.ac.uk/IPA/ipa.html> (国際音声学協会のホームページ)

